

ブナオ山観察舎と冬の自然



2021年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

ブナオ山観察舎は白山市尾添、白山一里野温泉スキー場から1.5km奥に位置する施設です。この観察舎は、ブナオ山の斜面に生息する野生動物たちをありのままの姿で観察できる全国的にも非常に珍しい施設です。

本誌では、そんなブナオ山観察舎について知ってもらうことを目的とし、この観察舎ではどんな動物たちが観察できるのか、どういった魅力があるのか等を切り口に執筆しました。本誌を通して、ブナオ山観察舎に興味を持ち、観察舎を利用される方にはその理解をより深めていただき、まだ訪れたことがない方には来館のきっかけになれば幸いです。きっと様々な動物たちが皆さんとの出会いを待っていることでしょう。



ドローンによるブナオ山観察舎の空中撮影写真

表紙 観察舎の近くで見られたニホンカモシカ

裏表紙 動物を観察する人たち

もくじ

ブナオ山観察舎について	2
ブナオ山を眺める	3
動物たちを観察する	4
よく観察される動物	5
冬の森を歩く	10
痕跡から動物を推理する	11
冬の植物を観察する	14
ブナオ山観察舎の歴史	16
観察される動物数の推移	17
ブナオ山観察舎のご利用にあたって	20
おわりに	21



ブナオ山観察舎
イメージキャラクター
“かもちゃん”

ブナオ山観察舎について

ブナオ山観察舎（以下、観察舎とします）は、尾添川をはさんだ対岸に広がる山毛櫨尾山（以下、ブナオ山とします）の南西側に広がる急斜面に生息する野生動物を観察するための施設です。主にほ乳類や鳥類など野生の動物をありのままの姿で観察できることが最大の魅力です。

観察舎の開館期間は年末年始を除いて11月20日から翌年5月5日まで、開館時間は10時から16時です。冬期を中心に開館しているのは理由があります。それは、植物が葉を落とすことで動物が隠れる場所が少なくなることで、積雪があることで、動物たちが見つけやすくなるからです。開館中はスタッフが常駐しているので、観察のお手伝いなどが必要なときはいつでもお声をおかけください。



ブナオ山観察舎の外観

ブナオ山を眺める

白山ろくにはブナを中心とする落葉広葉樹林が多く分布し、ブナオ山や観察舎周辺も同様な植生をしています。ここではブナ、ミズナラやオニグルミといった広葉樹のほか、スギの人工林も見られます。この中でも特にブナの花や実、ミズナラの実などはクマやサルにとって重要な食料となっています。

ブナオ山を含む尾添川上流域は、冬期の積雪が観察舎周辺で4m以上に達することもあり、また積雪時に雪崩の頻度が高い地域です。時には雪崩に巻き込まれてしまう動物たちが見られることもあり、自然の厳しさを知ることができます。



冬のブナオ山（標高1,365m）

動物たちを観察する

野生の動物は、普段は森林や草原の植物に隠れているため、その観察は簡単ではありません。さらに動物たちは我々人間や他の動物たちを常に警戒しているため、近寄ることもできません。ところがブナオ山と観察舎は500m以上離れているため、動物たちに警戒されることもなく自然な姿を観察することができます。観察舎には双眼鏡や望遠鏡が常設しており、自由にご使用いただき、遠くにいる動物たちの様子を観察できます。

実際に観察をしてみると、動物を双眼鏡で見つけることは思いのほか難しいものです。そんなときは、まずは肉眼でおおよその位置を確認し、次に同じ場所を双眼鏡でのぞく、という手順をおすすめします。すぐにできなくとも、できるまで何度も聞いて、何度も挑戦してみることが上達のコツです。またお子さまなど観察道具をうまく扱えない場合は、ライブ画像をモニターにうつして観察することもできます。



カモシカ観察のイメージ
雪上の黒っぽい点や動いているものを探してみよう

よく観察される動物

動物たちは、環境条件や習性などによって現れやすさが異なります。しかしながら、観察舎でこれらの動物が見られるかどうかは、それ以上にタイミングに左右されます。1時間で何頭も観察できることもあれば、半日以上で1頭も観察できないこともあります。さらに、雪や霧で対岸の斜面さえ見えないこともあります。そんなときは、これまでに撮影された動物たちの動画をご覧ください。

・観察舎周辺に生息する代表的なほ乳類

白山一帯には、ネズミ類やコウモリ類を含めて40種以上のほ乳類が生息しています。なお、ここで示す大きさは、頭から尻までの長さです。また、観察舎周辺ではこれらの足跡やフンなども見つかります。

ニホンカモシカ（ウシ科） 大きさ80～100cm



観察舎で最もよく見ることのできる動物です。標高が高い場所や険しい崖地にも適応した動物で、植物の葉や芽、枝の先端部分などを食しています。体色は黒褐色や灰褐色、白っぽいものと様々で、オスもメスも1対の黒く短い角を持っています。普段は森林で生活していますが、ブナオ山では開けた場所でもよく見つかります。

ニホンザル（オナガザル科） 大きさ50～60cm



観察舎周辺で頻繁に見られる動物です。サルの餌は幅広く、植物の芽、果実から昆虫類までいろいろなものを食べます。ただし、冬期は餌が少ないので、樹皮やササなどを食べる姿を見ることも多いです。サルは基本的にメスを中心とした群れ、つまり母系集団を形成し、行動します。観察舎の近くまで近づいてくることもあるので、注意深く観察しましょう。

ニホンイノシシ (イノシシ科) 大きさ 110 ~ 160cm



近年になって観察舎周辺で見られるようになった動物です。地表や地中にある植物の根、葉、実や昆虫、ミミズなどの小動物など、様々なものを食べます。かつては深い雪が降る地域では生息できないといわれたイノシシですが、近年ではブナオ山のような多雪地帯でも、母親が何頭も子どもを連れてくる様子を見ることができます。

ツキノワグマ (クマ科) 大きさ 120 ~ 180cm



クマは冬ごもりを行うため、ブナオ山では春と秋中心に見られ、特に春には親子連れで現れることもあります。大きく丈夫なアゴを持っていますが、餌のほとんどは植物質で、秋にはブナやミズナラの実を、春にはアザミやシシウドを食べる姿が見られます。クマの生息には広く豊かな自然環境が必要なため、クマが見られるということは、ブナオ山には豊かな自然環境が残っていることを示しています。

ノウサギ (ウサギ科) 大きさ 50cm



普段その姿を見ることはありませんが、観察舎周辺では雪上の足跡、フンや植物を食べたあとなどが数多く見られます。植物食で、様々な植物の葉、芽、枝、木の皮を食べます。夏は体が茶色の毛で覆われていますが、白山ろくのように積雪のある地域では、冬に白い毛に生え変わります。

キツネ (イヌ科) 大きさ 60 ~ 80cm



ブナオ山斜面でその姿が観察されることは少ないですが、雪上に残る足跡はよく見つかります。ネズミや鳥などの動物を捕まえて食べる事が多く、それ以外に果実などを食べることもあります。石川県では、海岸沿いから白山山頂近くまで広い範囲に生息しています。

テン (イタチ科) 大きさ 50cm



キツネと同じく、ブナオ山斜面で見られることはあまりありませんが、観察舎周辺では雪の上についた足跡が観察できます。ネズミや鳥類などを襲って食べるほか、トカゲ、カエルなどの動物や昆虫類、果実なども好んで食べます。白山ろく周辺の森やその周辺に多く生息しており、ときには納屋のような場所をねぐらや巣にしていることもあります。

ニホンリス (リス科) 大きさ 20cm



雪が降った後、観察舎周辺ではリスの小さな足跡が見られます。昼間に活動しますが、その姿を見ることはほとんどありません。樹上にいて、植物の種や実、キノコ、昆虫などを食べます。白山ろくの森にも多く生息しており、リスにかじられた松ぼっくりやクルミの残りがいが落ちていることがあります。

・観察舎周辺に生息する代表的な鳥類

観察舎からはほ乳類以外にも様々な鳥たちが観察できます。鳥類は一年中同じところで生活する種類もありますが、季節移動を行う種類もいるため、季節によって観察できる種類が違います。なお、ここで示す大きさとは、くちばしから尾までの長さです。

イヌワシ（タカ科） 大きさ 80～90cm



観察舎からは、天気の良い日にブナオ山上空を悠々と飛んでいる姿を見ることができます。体が黒褐色で翼を広げると2mに達する大きなタカの仲間です。石川県の県鳥に指定されており、白山周辺の山地を中心に生息し、ノウサギやテンなどの中小型ほ乳類、ヤマドリなどの鳥類、アオダイショウなどのヘビ類を捕まえて食べます。

クマタカ（タカ科） 大きさ 70～80cm



イヌワシと同様、ブナオ山の上空を飛んでいます。体はイヌワシよりも一回り小さく、翼の下面が白く、黒い縞もようが入るのでイヌワシと区別できます。ノウサギ、ヘビやキジバト、ヒヨドリなど、森林内に生息するさまざまな生物を獲物としています。

アオゲラ（キツツキ科） 大きさ 30cm



観察舎周辺の木の幹や枝に縦にとまり、餌を探している様子が観察できるキツツキの仲間です。背中が黄緑、腹部は白地に黒の縞模様があり、ほほには赤い部分があります。頭が赤くなるのはオスだけです。また、昆虫類を木の幹の中から取り出して食べます。観察舎周辺ではこの他に、コゲラ、アカゲラ、オオアカゲラなどのキツツキ類が観察できます。

ヤマガラ（シジュウカラ科） 大きさ 15cm



観察舎周辺でよく見られるスズメくらいの大きさのカラの仲間です。他のカラの仲間とは背中や腹部が赤茶色であることから見分けられます。冬期には、ブナオ山観察舎でもエナガやシジュウカラなどと群れで行動している様子が観察できます。ヤマガラをはじめ、多くの小鳥は雑食性で、昆虫やクモの他、木の実などを食べます。

カケス（カラス科） 大きさ 30cm



観察舎の周りで「ジャー、ジャー」と少しうるさいくらいの声で鳴いています。カラスの仲間ですが、頭のとっぺんが白と黒のまだら、腹は白、目の周りや尾羽は黒、背中から胸にかけては薄い褐色、翼には青い部分がある色合いの美しい鳥です。餌となるドングリ類を樹皮の間などに貯めこむ習性があります。

冬の森を歩く

観察舎では、かんじきハイクを行っています。「かんじき」とは、雪の上を歩くために用いられる道具で、オオバクロモジやマルバマンサクなど白山ろくに多い樹木を使って作られています。かんじきは観察舎に常備しており、スタッフが履き方から説明します。かんじきを使いたい方は防寒着、手袋、帽子や長靴など、野外で活動できる格好でお越しください。

かんじきハイクでは、自然解説を行うスタッフとともに1～2時間程度で雪の上を歩きながら、観察舎周辺を散策します。積雪量が十分なときは、少し遠出して森の中や観察舎裏の林道まで歩くこともできます。ただし、積雪時に限定されてしまう活動なので、積雪がないときや、悪天候のときは実施できないこともあります。



かんじきハイクの様子
足につけた輪状のものがかんじき

痕跡から動物を推理する

野生の動物たちは普段、我々人間や他の動物たちに見つからないようにひっそりと生きているため、普通では近づくことはもとより観察することすらできません。しかしながら、動物たちは動き回ったところにその痕を残します。その残された痕を痕跡こんせきといい、それは主に足跡あしあと、食痕しょくこん（食べ物を食べた痕）、フンなどを指します。痕跡をよく観察すると、どんな動物がどんなところを利用していたのか、知ることができます。かんじきハイクではこういった痕跡を探すことを通して、動物たちの活動を身近に感じることができます。

それでは、観察舎周辺で見ることができる痕跡を紹介しましょう。

・足跡

雪上の足跡は、どんな動物が通ったのか、またどこへ向かったのかを推理することができます。リスやノウサギの足跡は大きな方が後足、小さな方が前足の跡で、人間が跳び箱を飛ぶような要領で移動しています。足跡を見れば、移動方向を推理することもできます。その先にはきつと餌があったのかもしれませんが。



リスの足跡
右側の大きな跡が後足



ノウサギの足跡
右から左方向へ移動しています

写真の矢印は移動方向を示しています



キツネの足跡
イヌやネコの仲間は
4本の指の跡が付きます



テンの足跡
イタチの仲間は
5本の指の跡が付きます



カモシカの足跡
カモシカ、ニホンジカ、イノシシは
ひづめの跡が残ります



サルがツタウルシの樹皮を
かじった痕



クマがスギの樹皮を
かじった痕

・食痕

動物に食べられた植物を見ると、どんな動物が何をどんなふうにかけていたのかわかります。サルは人間のように器用に口先を使えるので、樹皮だけをきれいにかじって食べます。鋭利な歯を持つノウサギの食痕は、カッターで切ったような痕が残ります。一方で、カモシカやニホンジカは上の前歯がないので、枝を引きちぎったような痕が残ります。



ノウサギの食痕



カモシカの食痕



木の実を食べたテンのフン



ノウサギのフン

・フン

動物によって食べるものが異なっていること、フン自体の大きさや形が違うことなどから、フンを見ればどんな動物のものなのか知ることができます。たとえば左の写真のように果実が多く含まれていて目立つところにあるのはテンのフンで、右のように植物の繊維を含んだ小さく丸いフンはノウサギのもので、フンの内容物から、動物が何を食べたかを推測することもできます。

冬の植物を観察する

観察舎の周りを見渡すと、冬に見られる樹木は葉を落としたものがほとんどです。かんじきハイクでは、これら葉を落とした樹木も観察できます。

冬の植物では、「冬芽」と「葉痕」に注目するのがポイントです。冬芽は、樹木が冬を越す準備をしている段階でつくられる芽のことです。葉痕は、葉を落とした樹木の、葉の付け根にできる痕を指します。この冬芽や葉痕は、樹木によって形が様々です。

・観察舎周辺で見られる植物

オニグルミ（クルミ科）



観察舎周辺に多く生育し、10m以上になる木です。枝先の冬芽は大きく円錐形、葉痕も大きくT字型で、その形はヒツジの顔に似ています。白山ろくでは沢沿いに多く生育しており、その実の殻はとても堅いですが、中の実は多くの動物が好み、人間もクルミ和えやお菓子の材料に使います。

サワグルミ（クルミ科）



オニグルミと同じく観察舎周辺でよく見られ、10m以上になる高木です。枝先の冬芽はオニグルミよりもとがっていて、光沢のある毛が生えています。葉痕はハート形から三角形で、眠っている人の顔のように見えます。白山ろくの谷筋に多く、オニグルミと同じクルミの仲間ですが、オニグルミと違って堅い殻のなる実はできません。

キハダ（ミカン科）



観察舎周辺で見られる高さ10m以上になる高木です。冬芽は半球形で赤みを帯び、葉痕は冬芽を囲んでいて、全体がピエロの顔のようにも見えます。幹の外側の皮をはいだ内側の皮は黄色く、苦みがあります。この部分は黄檗と言われ、生薬として用いられます。ミカンの仲間で、秋にできる大きさ1cmほどの小さな果実は、野鳥やクマが好んで食べます。

オオカメノキ（レンブクソウ科）



観察舎周辺で見られる高さ5m程になる樹木です。冬芽は葉の芽が対になって出てその間に丸い花芽がついていて、人がバンザイしているように見えます。葉痕は小さいですが、よく見るとかわいい顔のようにも見えます。円形に近い亀の甲羅のような葉、春に咲く白い花、夏から秋になる赤い実など、白山ろくの山地でもよく見られる種類です。

オオバクロモジ（クスノキ科）



観察舎周辺に多い、高さ5m程になる樹木です。冬芽のうち、葉の芽はやや細長く先が尖っていて、その横に玉ねぎの形に似た丸い花芽がついています。半円形の葉痕は小さくあまり目立ちません。日本海側の山地に広く分布し、白山ろくでも落葉広葉樹林内に多く生育しています。葉や枝などに強い芳香があり、この種類から作られる爪楊枝は高級品として知られています。

ブナオ山観察舎の歴史

ブナオ山観察舎は、石川県が全国でも初めての試みとして白山山系に生息する野生動物を一般の方々にも観察できるよう、1981年（昭和56年）に建設されました。同時に、自然環境教育の場として有効活用してもらいたい、という設置当初の意志は、今もお引き継がれています。また今でも昔と変わらずにブナオ山で動物を観察することができるのは、ブナオ山の大部分が白山国立公園として指定されているため、ブナオ山に生息する野生動物が人間活動の影響をほとんど受けずに今まで生息することができているからでしょう。

いまブナオ山観察舎があるところは、観察舎が設置される以前から、研究者たちが動物観察をするためにこぞって利用していた場所でした。きっと研究者の方の「観察をいろいろな人たちにも楽しんでもらいたい」という意志が、観察舎設置の発端だったのでしょうか。

一方で、観察舎が設置されてから少しずつ変わったこともあります。それは、一部の野生動物を取り巻く環境と個体数の変化です。では、どういった動物たちが変化してきたのでしょうか。



開館当初の写真

観察される動物数の推移

近年になって、イノシシやニホンジカは全国的に増加傾向にあります。これは様々な背景によって動物たちの生息状況が変化してきたことによります。こういった観察された動物数の変化は、ブナオ山観察舎でも見られたのでしょうか。

観察舎で観察した動物は、その記録を職員がまとめています。記録には観察舎の設置以来約40年のデータが蓄積されていて、その記録とそこから読み取れることを少し紹介します。ここで紹介する記録は小谷ほか（2018）がまとめたものの引用および一部を改変したものです。

・カモシカの観察数

カモシカの観察数は概ね横ばいで推移していますが、1990年代以降はゆるやかに減少しているように見えます（図1）。もともと奥山に多く棲んでいたカモシカが低標高域など人里近くでも生息するようになり、奥山での生息密度が低下したことが理由と考えられています。この傾向は石川県以外のカモシカ生息地でも確認されていますが、はっきりとした原因はよくわかっていません。

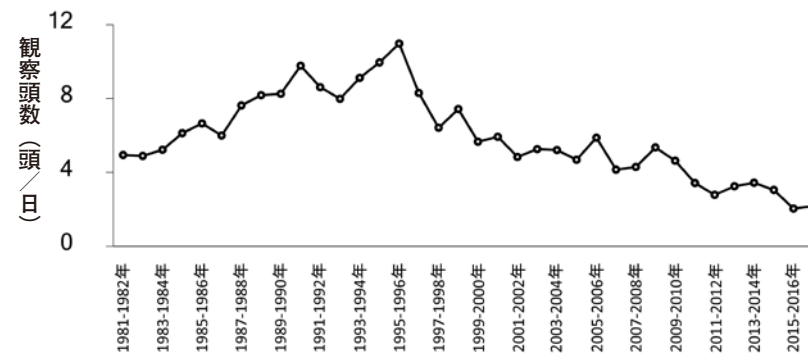


図1 ブナオ山観察舎におけるカモシカの観察数の推移
小谷ほか（2018）より引用、一部改変

・ニホンザルの観察数

ニホンザルの観察数は増減があるものの、^{おおむ}概ね横ばいで推移しています（図2）。このことからブナオ山ではサルが安定的に生息しています。

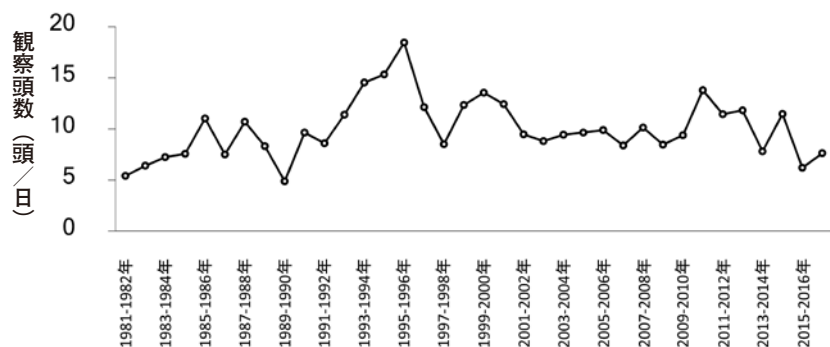


図2 ブナオ山観察舎におけるニホンザルの観察数の推移
小谷ほか（2018）より引用、一部改変

・イノシシの観察数

イノシシの観察数は2007年以降、急激に増加傾向にあり、石川県内でも同時期からイノシシの目撃が多くなっています（図3）。これは全国的に中山間地域の耕作放棄地などイノシシが生息できる環境が増えたことによって、イノシシの個体数が増え、奥山であるブナオ山にも生息するようになったものと考えられます。

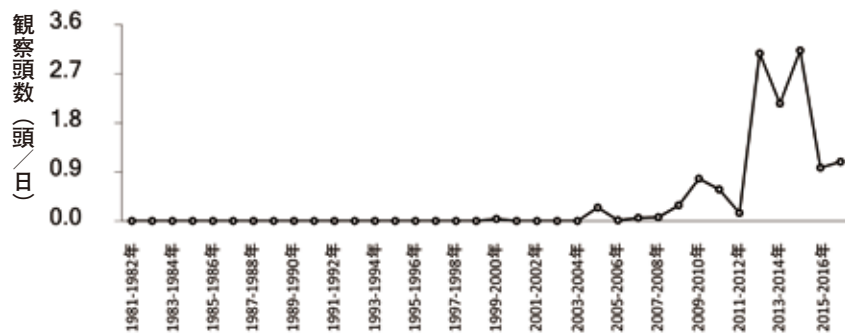


図3 ブナオ山観察舎におけるイノシシの観察数の推移
小谷ほか（2018）より引用、一部改変

・ツキノワグマの観察数

ツキノワグマの観察数は、2006年から増加傾向にあります（図4）。この観察数の増加は、2000年にブナオ山一帯が鳥獣保護区として指定され、狩猟が禁止されたことによって、クマの個体数も増加したためだと考えられます。

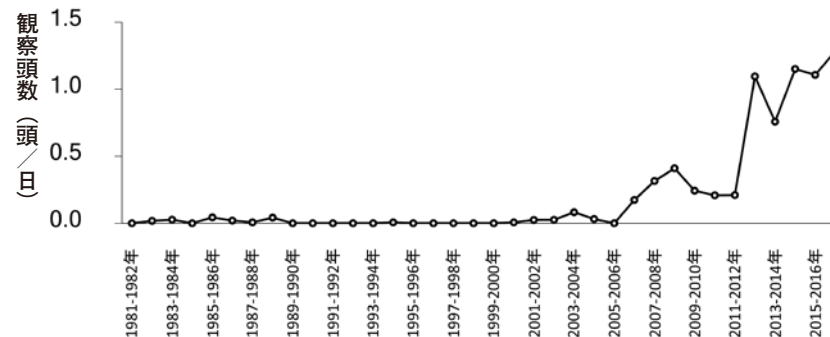


図4 ブナオ山観察舎におけるツキノワグマの観察数の推移
小谷ほか（2018）より引用、一部改変

以上のことから、野生動物の生息状況はさまざまな要因によって常に変化することがわかります。こういった性質を非定常性といい、ここで紹介した動物以外にもあらゆる生物の生息状況は非定常性を持ち、刻一刻と変化します。ここで紹介したような長期間の観察記録は、今後ある動物が見られなくなることがあったときに「いつから見られなくなったか」、そして「なぜ見られなくなったのか」、といったことを考える際の貴重な資料となります。

・参考文献

小谷直樹・谷野一道・南出洋・甲部芳彦（2018）ブナオ山観察舎における大中型哺乳類の観察記録。石川県白山自然保護センター研究報告 44：49-52

ブナオ山観察舎のご利用にあたって

- ・白山自然保護センター職員が常駐しています。気軽に声をおかけください。
- ・観察舎内には双眼鏡および望遠鏡を常設しています。自由にご使用ください。
- ・冬の観察舎周辺は非常に寒くなります。観察舎内も寒いので、スキーウェアなど暖かい服装でお越しください。積雪があるときは長靴やスパッツの装備もおすすめです。
- ・白山自然保護センターでは、ホームページ、ツイッターを開設しており、ブナオ山観察舎の自然情報などを発信しています。ぜひご活用ください。

ホームページ：<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/>

ツイッター：https://twitter.com/Ishikawa_HNCC

- ・かんじきハイクは以下の時期、時間で実施しています。

実施期間：12～4月の積雪時、土・日・祝日

実施時間：10時00分～15時00分の間、1～2時間程度

*積雪状況や行事等により中止、変更の場合もあります。

観察時の服装



おわりに

本誌ではブナオ山観察舎について、写真や解説を交えて紹介してきました。開館以来、多くの方が訪れ、ブナオ山の自然に触れていかれました。

豪雪地帯といわれる白山ろくには厳しい冬が毎年訪れますが、冬にも自然の魅力がたくさんあります。ぜひブナオ山観察舎にお越しいただき、本紙を参考に白山ろくの冬の自然を堪能していただければと思います。

ブナオ山観察舎までのアクセス



北陸自動車道
白山ICから国道157号経由で約60分
小松ICから国道360号経由で約60分
勝山ICから国道157号経由で約70分

ブナオ山観察舎
開館期間 11月20日～翌年5月5日
開館時間 10:00～16:00 (無料・開館期間中無休、ただし年末年始を除く)
〒920-2333 石川県白山市尾添ソ72-5番地 TEL 076-256-7250

白山の自然誌 41 ブナオ山観察舎と 冬の自然

発行日 令和3年3月31日
文・構成 北市 仁・平松 新一
写真 南出 洋
イラスト 内藤 恭子・稲田 奈緒
発行 石川県白山自然保護センター
〒920-2326 石川県白山市木滑ヌ4
Tel. 076-255-5321 Fax. 076-255-5323
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html>
E-mail: hakusan@pref.ishikawa.lg.jp
印刷 株式会社 中川印刷